

『十二夜』における Malvolio の成長

村上世津子*

(平成25年10月31日受理)

Malvolio's Growth in *Twelfth Night*

Setsuko MURAKAMI*

When I first read *Twelfth Night*, the following words of Viola puzzled me: "[The captain] upon some action/ Is now in durance, at Malvolio's suit,/ A gentleman and follower of my lady's" (5.1.259-61; emphasis mine). Although the word "gentleman" here means "attendant," other uses of "gentleman" in the text suggest that the word has a connotation of respectability. It is important to note that Viola's words trigger Malvolio's delivery from the dark room.

The impactful line "I'll be revenged on the whole pack of you!" (5.1.355) has led critics to conclude that Malvolio is expelled from the play. However, Viola's use of the word "gentleman" contradicts this reading. How can "gentleman" and "revenge" be reconciled? In this paper, we will reconsider Malvolio from the following viewpoints: (1) his growth in the play and (2) his role in the dramatic structure.

Key words: Malvolio, Fool, Viola

1. はじめに

Twelfth Night(以下 *TN*と表記する)を初めて読んだ時に引っかかりを覚えた箇所がある。5幕1場で兄と再会し、彼女が Viola であることを証明するためには男の衣装を脱ぎ捨て女の衣装を身につけるのを待つばかりになった時に Viola が言う次の台詞である:「私を初めてこの海岸へ連れてきてくれた船長さんが女の衣装を預かっています。その船長さんは奥様の執事(a gentleman and follower of my lady's)の Malvolio さんの訴えで獄につながれています」(5.1.258-61)¹。ここで用いられている "gentleman" は一義的には直後の "follower" と同じ「従者」という意味である。しかし "gentleman" が Malvolio に対して使われるのは "gentleman and follower of my lady's" と Viola の台詞を聞いて Malvolio のことを思い出した Olivia が言う "poor gentleman" (5.1.264)を別にすると暗い部屋の中で Malvolio が「ペンとインクと紙とろうそく」を持ってきてくれるように Feste をお願いする時に言う "As I am a gentleman" (4.2.68)の中だけである。実際2幕2場で身に覚えのない ring をつき返された時には Viola も Malvolio のことを "churlish messenger" (2.2.20)と呼んでいた。この劇の中で Malvolio は彼の呼称に敏感である。彼が Maria の策略を見抜けなかった1つの要因は Olivia が口にした "fellow" (3.4.55)と

* 英文学(建築学科)准教授

という言葉にそれまで彼に帰せられていた呼称との差異を感じたからである。呼称の変化が境遇を左右する劇の中で “gentleman” という呼称を軽んずることはできない。何故それまでの呼び方と異なり劇の終わり近くになって Malvolio が “gentleman” と呼ばれるようになるのだろうか。そもそもこの劇の中で “gentleman” はどのようなニュアンスを持つのだろうか。

2. Viola と “gentleman”

TNの中で “gentleman” という語が持つニュアンスを探るためにもう1人の “gentleman and follower” である Viola に対する “gentleman” という語の使われ方について検討しよう。Viola と “gentleman” の結びつきで最も印象的な台詞は次の台詞である：「『あなたのお家柄は？』『今の運命よりは上ですが今の身分も悪くはありません。私は gentleman です。』確かにあなたは gentleman よ。弁舌も容姿も体躯も振舞いも精神もあなたに5重の紋章を与えているわ」(1.5.244-48)。ここでの “gentleman” は「貴族階級には属さないが良家の出」(Schmidt 1)を表す。他方、明確に「従者」の意味の “gentleman” が Viola に用いられている箇所もある。頭から血を流している Sir Andrew を見て Olivia が「誰にやられたの」(5.1.167)と聞いた時の Sir Andrew の台詞 “The count’s gentleman, one Cesario” (5.1.168)とその台詞を受けて言う Orsino の台詞 “My gentleman Cesario?” (5.1.170)である。この他 “the young gentleman of the Count Orsino” (3.4.51)でも従者の意味で “gentleman” が用いられている。Viola は変装して Cesario と名乗り Orsino に仕えているから「Orsino の従者」という表現が頻繁に Viola に帰せられる。しかし明確に「従者」を表す “gentleman” が Viola に帰せられている箇所は多くない。代わりに “that same peevish messenger” (1.5.255) “the count’s man” (1.5.256) “the youth of the count’s” (2.3.112-13) “the count’s youth” (3.2.27)が用いられている。

他の箇所では「多くの供を連れている」(1.5.84)ことから判断すると “a young gentleman” (1.5.81)は高貴な身分の若者に対して用いられている。同様に3幕4場でも Sir Toby が「有能で育ちも良い」(3.4.155)と判断した若者に対して “the young gentleman” (3.4.155)という語を用いているし Viola を Sebastian と間違った Antonio が決闘に巻き込まれそうになった Viola の代わりを申し出る時に用いる “this young gentleman” (3.4.218)も彼が危険を冒してまで付き従いたいと思うほど「崇拜」(2.1.35)する人物に対して用いている言葉である。3幕4場185行で Sir Toby が Viola に対して呼びかける時の “gentleman” の使い方は異色である。Sir Toby は端から “thee” (3.4.185; 187; 189)や “thou” (3.4.187; 188)や “thy” (3.4.188; 190)を連発することによって居丈高な口調で話しかけている時に “gentleman” と呼びかけているからである。しかしここで Sir Toby が Viola を騎士である Sir Andrew の対戦相手足りうる人物だと見なしていることは注意を要する。Viola の腰抜けぶりにつけこんで居丈高な態度で脅しつけてやろうという気持ちと Viola の冒しがたい気品を尊重する気持ちがない交ぜになった表現が “gentleman” と “thee” や “thou”

や “thy” の混合であり、完全に Viola を侮辱しているわけではないのである。

逆に Viola に対して “gentleman” の使用が回避されている箇所もある。自惚れ病にかかっていて他者を “mankind” (1.5.126) としか見なすことのできない Malvolio は Viola の人格に刻印されている紋章に気づかない。だから “young gentleman” ではなくて “young fellow” (1.5.115) と表現する。反対に Viola の恋の虜になり自制心の利かなくなった Olivia が Malvolio に気づかれずに彼を恋の使者として利用するためには Viola を貶める言葉を選択しなければならない。そのため “gentleman” は退けられ “that same peevish messenger” (1.5.255) や “the count’s man” (1.5.256) や “the youth” (1.5.260) が選択される。3幕2場で Sir Andrew が Viola のことを “the count’s servingman” (3.2.4-5) と表現する時にも彼の気持ちが反映されている。Sir Andrew は彼より身分が上の Orsino が Olivia に求愛しているなら自分には見込みがないと思って断念しようとしていた。自分より身分が上の者との競争に勝ち目がないことを認めることは容易だが相手が従者となると悔しさは倍増する。その悔しさを反映した表現が “the count’s servingman” である。Sir Andrew の怒りをなだめ彼を丸め込む工作をするためには Viola がたいしたことのない人物であり Olivia が本気で彼女に惚れているわけではなく Sir Andrew の気を引くための囷として Viola に気のあるような素振りをして見せただけだと思い込まさなければならぬ。そのような時に Sir Toby と Fabian は “gentleman” を避け “the youth” (3.2.14, 18, 46, 50) や “the count’s youth” (3.2.27) を選択する。Sir Andrew が Viola 宛に書いた挑戦状の中でも “gentleman” は避けられ “youth” (3.4.125) や “a scurvy fellow” (3.4.126) が用いられている。恋人を取られて憤慨している Andrew には Viola の中になんら尊敬できる要素も見出せないからである。居丈高な態度で Viola を脅しつけても心の底に Viola の気品を尊重する気持ちがあつた時には “gentleman” を使っていた Toby が保身のためには Viola が命の恩人を平気で裏切るのを見て軽蔑の念を抱いた時には “a very dishonest paltry boy” (3.4.336) を用い、Fabian も “a coward, a most devout coward” (3.4.339) と言う。同様に Antonio も Sebastian を崇拝していた時には “gentleman” を使っていたが Viola を Sebastian と間違え見掛け倒しの恩知らずな裏切り者だと思った時には “gentleman” を使わず “that most ungrateful boy” (5.1.66) と言う。

Schmidt によれば “gentleman” には「貴族ではないが良家の出」(1)や「名誉を重んじ、育ちもよい人物」(2)以外に「高位者に仕える従者」(4)という意味がある。“gentleman” は必ずしも地位を表す言葉ではない。だから同一人物を表すのに “gentleman” が使われたり使われなかったりする。その一方で Viola について “gentleman” の使用の有無を比較すると、“gentleman” が使用されるのは何らかの尊敬の念が感じられる時に限定されることがわかる。それでは servant と gentleman と steward はどういう関係にあるのか。servant と master(mistress)の結婚という点では Viola と Orsino の結婚も Malvolio と Olivia の結婚も同じなのに何故前者は好意的に受け止められ後者は非難されるのだろうか。

か。

3. servant/gentleman/steward

近代初期の England の社会では servants という category は出自によって固定されたものではなく「将来 masters になる者（及びその子弟）も青年期に servants になるのが普通であり, servants であった者が, 特に成長に伴い masters になるのも日常的なことであった」(Evet 22). それどころか当時の社会は「humblest peasant から神に対してのみ “service” を負う君主に至るまで途切れることのない “service” の鎖で構成されていた」(Neill, 22). つまり「農業労働者も貴族の子弟も servant であった」(Schalkwyk 78). だから Orsino ではなくその従者である Viola 扮する Cesario に恋した時に Olivia にとって問題になるのは Cesario が servant であるかどうかではなくて gentleman servant かどうかである (Schalkwyk 89): 「確かにあなたは gentleman だわ. 弁舌も容姿も体躯も振舞いも精神もあなたに 5 重の紋章を与えているわ. 慌ててはダメ. 落ち着いて, 落ち着いて」(筆者強調).

広義の servant は階級を表す語ではないが他方では Elizabeth 朝 England の貴族の servants の間には厳然とした階級の区別が存在した. Burnett によれば「groom や stable-hands や waiters や footmen や musicians ら “yeoman servants” は下層に属し, 邸の管理に携わる steward や chief chamberlain や comptroller や receiver や secretary や gentleman usher は “gentleman servant” で上流層に属し, 後者に属する servants は貴族の “chief officers” を構成した」(155). Malvolio が就任している steward は「servants の中で最大の責任が託されており servants 中最高の権威を主張することができた」(Burnett 156). よって Viola が Orsino 邸で就いている地位よりも Malvolio が Olivia 邸で就いている地位の方が高い. それにも関わらず Orsino と Viola, Olivia と Sebastian の結婚が劇中人物にも観客にも肯定的に受け止められるのに対して Olivia に懸想する Malvolio が糾弾される原因の 1 つは以下で述べる当時の社会情勢の中に求めることができる.

Burnett は次のように述べている. すなはち当時の England には高位にのし上がった steward が少数ながら存在した. たとえば John Thynne は一介の Stropshire farmer の息子から Protector Somerset である Edward Seymour の steward になり主人の援助を受けて土地を買い, 市のポストを得て knight に叙せられ前 London 市長 Sir Richard Gresham の娘にして相続人と結婚した(171). Burnett はさらに次のように言っている. すなはち社会的地位の上昇に成功した stewards の出現は貴族の存在を脅かし, 貴族たちの間に stewards は成り上がり者であるが故に自己中心的な野心家であり, 他者に共感したり他者に配慮できる能力, つまり “gentle attributes” に欠けていて適切な家政を執る能力を持たないのではないかという懸念が生じた (171).

Lady of the Strachy が Yeoman of the Wardrobe と結婚した(2. 5. 34-35)前例があるか

ら自分も Olivia と結婚して Count になることを夢想する Malvolio はまさに当時の England の貴族が嫌悪感を抱いていた “gentle attributes” に欠けていて適切な家政を執ることができない steward を体現する。Malvolio と Olivia の結婚も Viola と Orsino の結婚も servant と master (mistress) の結婚という点からすれば同じであり、しかも Orsino 邸での Viola の servant としての地位よりも Olivia 邸での Malvolio のそれの方が上なのに劇中人物や観客に Viola と Orsino の結婚が好意的に受け止められるのに Malvolio の Olivia に対する懸想が非難されるのは「5重の紋章」が Viola が “gentleman” であることを証明するのに対して Malvolio は “gentle attributes” に欠けた成り上がり者の steward を連想させるからである。

それではこの劇の終わり近くで Viola が Malvolio に “gentleman” という語を用いるのは何故なのか。Viola は恋という概念に溺れていて使いの者を送って Olivia に求愛するだけで自ら行動しようとしなかった Orsino に自らの体験を基にした「父の娘」の話を通して「本物の恋」の手ほどきをする。Viola はまた兄の喪に服して7年間は「四大そのものに対して彼女の素顔を見せない」(1.2.27)と公言していた Olivia に彼女の本当の心の中を気づかせる。このような「教育者」である Viola の “gentleman” という言葉がきっかけとなって Malvolio が暗い部屋から解放されることは特筆に価する。次項では “gentleman” という語の使用と Malvolio の成長の関係について考察したい。

4. 暗い部屋での試練を通した Malvolio の成長

この劇の初めの Malvolio を端的に表す言葉は「自惚れ病」(1.5.73)である。自惚れ病にかかっている Malvolio は「君たちとは出来が違う」(3.4.106)と思う。他者に対する sympathy に欠けているから他者と共に飲み、食い、笑い、人生の喜びを共有することができない。また他者の痛みを理解できないから「阿呆ぶりが古くなって人から嫌われる」(1.5.91-92)ようになり解雇の瀬戸際にある Feste の無能をあげつらう。Olivia の邸の階下でドンちゃん騒ぎをしている Sir Toby らに注意をする時にも非常に高圧的な態度に出る。すなわち「時と場所と人」(2.3.79)を弁えないなら出て行ってくれと言って脅すのである。Feste と Sir Toby 及び仲間たちを敵に回した Malvolio は彼らに復讐される。Malvolio は Maria が考案した Olivia の偽手紙を本物と信じ込み Olivia が彼に求愛していると思い込む。Malvolio がそんなにも容易に騙されるのは、Maria の手紙が筆跡(2.5.72)も言葉使い(2.5.77)も封印(2.5.78)も Olivia のものとそっくりであったからだが、それだけが原因ではない。彼宛とは明記されていない—「この手紙は誰にあてたものだろう」(2.5.79)—手紙の封ろうを無断で壊したりしなければ、彼の名前に似せるために MOAI という字の並べ方を無理に押し潰したり(2.5.117)しなければ、黄色い靴下は Olivia が「忌み嫌って」(2.5.166)いるもので、十字の靴下留は Olivia が「嫌悪している」(2.5.166)ものであり、笑いかけることが「憂いに取りつかれている奥様のご気分にあさわしくない」(2.5.167-68)

ものであることに気付くことができれば、そうたやすく騙されはしなかったであろう。偽手紙に指示された通りの格好で Olivia の前に現れ笑いかけた時の Olivia の反応に注意していれば騙されなかったであろう：「笑っているの、まじめな用事で呼んだのだけど」(3. 4. 18)；「どうしてお前は笑ってそんなに自分の手にキスをするの」(3. 4. 29-30)。Malvolio が偽手紙の文章をそらんじて Olivia には通じない、それどころか Malvolio が「もし望まないならいつまでも召使のままでいるがよい」(3. 4. 49)という文をそらந்த時には「夏の暑さでいかれてしまったんだわ」(3. 4. 50)と言う、これだけ歴然とした反証が存在するにもかかわらず Malvolio が Olivia の偽手紙に騙されるのは、Olivia と結婚して Count になる考えに夢中で Olivia の心情に気づかないからである。当時社会問題化していた gentle attributes に欠ける成り上がり者の steward の権化だったからである。

狂人 Malvolio を訪問した Feste 扮する Sir Topas の「この部屋にはバリケードのように透明な張り出し窓がついている、それに南北向の高窓は黒檀のように輝いておる」(4. 2. 30-31)という言葉は阿呆特有の戯言である。しかし「無知以外に暗黒はない、お前は霧の中のエジプト人以上に無知に当惑させられておる」(4. 2. 34-35)という言葉は半面の真理をつく言葉である。自惚れ病にかかっている他者の言葉に謙虚に耳を傾けることができない Malvolio は自分の行動が他者の目にどのように映っているか、気づかないからである。同様に Feste が Malvolio に「獵鳥についての Pythagoras の見解」(4. 2. 40)についての意見を求めることも単なる阿呆の戯言ではない。Malvolio は「魂は高貴なものと考えますから彼の見解を認めることはできません」(4. 2. 43)と答える。彼の言葉に反して Malvolio は「魂を高貴なものとする」どころか Olivia を彼が Count になるための道具としか見なしてこなかった。人間の魂は高貴なものだから人間を獵鳥と同列にすることはできない、ましてや人間を道具扱いにするのはもっての他であるという Malvolio の答えは彼の成長の第一歩を記すものである。Malvolio が成長の兆しを見せたから Sir Toby は「あいつをうまく救出できるならそうしてもらいたい」(4. 2. 54-55)と言うのである。

Malvolio の成長が明確になるのは本来の姿で彼を訪問した Feste との会話の中である。Malvolio は「ろうそくとペンとインクと紙を持ってくるのなら gentleman として誓うが一生恩に着る」(4. 2. 67-69)と言う。Ralph Berry の指摘するように “Steward” に代わるものとして “Count” になりたがった男が “gentleman” として誓うことは彼が “fellowship” を発見したことを示唆しており、それは阿呆への呼びかけの変化に反映されている(71)。

“barren rascal” (1. 5. 67)と見下していたのと対照的に Malvolio は阿呆を “Good fool” (4. 2. 66, 90, 93)と呼びかけるようになるが、この “good” は「礼儀正しい呼びかけを表す形容詞」(*OED* A12c)である。また「毫碌は利口者をだめにしますが阿呆ぶりには磨きをかけます」(1. 5. 63-64)という言葉と対照的に「私は君と同様に正気だ」(4. 2. 73-74)と言うようになる。Feste が「ろうそくと紙とインク」を持ってきてやると約束するのは Malvolio が Feste を対等な存在として扱ったからである。Malvolio の許を去る時に歌う歌

の中で Feste は Malvolio を devil, 自分をエリザベス朝の阿呆の先祖である old Vice にたとえている。Malvolio を devil にたとえることは 3 幕 4 場で Sir Toby と Maria らが Malvolio を狂人扱いする時に彼が devil に取りつかれていることに繰り返し言及した (3.4.74-75, 80, 85, 87, 96, 101) ことを引き継ぐものである。しかしここで Feste 自身を devil の相棒である old Vice にたとえていることは彼も Malvolio に親近感を抱いていることを示唆する。歌の終わりで Feste は Malvolio を “goodman devil” (4.2.113) と呼ぶ。“goodman” は「時として好意を表す漠然とした肩書きや敬称として用いられ」(OED1) 「婉曲的に Devil に用いられる」(OED1b) 語である。“goodman” はまた「郷紳以下の人、特にヨーマンや農民の名前の前に付ける尊称」(OED3b) でもある。“goodman devil” は “As I am a gentleman” に呼応する語である。“gentleman” とまでは認められないが相棒と認めて使いに出かけるという Feste の意思を表す。

5. 抗議の仕方の変化の中に見られる Malvolio の成長

Malvolio の成長は彼の抗議の仕方の変化の中に顕著に見て取れる。2 幕 3 場で夜中に Olivia 邸の階下でドンちゃん騒ぎをする連中に注意をする時に Malvolio は次のような物言いをして相手の反省を促すどころか反発を買った：

My masters, are you mad? Or what are you? Have you no wit, manners, nor honesty but to gabble like tinkers at this time of night? Do ye make an alehouse of my lady's house, that ye squeak out your coziers' catches without any mitigation or remorse of voice? Is there no respect of place, persons, nor time in you? (2.3.75-79)

“My masters” という呼びかけこそ丁寧であるが「気でも狂っているのですか」は羽目をはずしてはいるが正気の人物を狂人扱いするものである。そして「こんな夜更けに鋤掛屋よろしく大声でがなり立てるとは知恵も礼儀も良識もないのですか」は Malvolio の Lady である Olivia の叔父の Sir Toby を含めた騎士を鋤掛屋扱いするものである。同様に「靴直しの歌をわめき散らす」という台詞も騎士を靴直し扱いにするものである。servant 頭である steward として家政を預かる Malvolio には主人の迷惑も顧みず夜中にドンちゃん騒ぎをする輩を取り締まる権限がある。主人が喪に服している時にはなおさらその必要性が高まるし、ましてやこの場合 Malvolio は Olivia の命を受けているのである。しかしながらドンちゃん騒ぎを取り締まることと騒ぎを起こしている連中を狂人扱いしたり騎士を鋤掛屋や靴直しと同列に扱うことは同じではない。夜中に寝ているところを起こされたであろう Malvolio の機嫌が悪いのは当然である。Feste の joke も解さず、杓子定規に物事を考えるピューリタンの性格をしている Malvolio は昼間でもドンちゃん騒ぎに対する耐性

は低かったであろう。これらの要因を考慮するならばドンちゃん騒ぎを取り締まる時に Malvolio が感情の赴くままに怒りを爆発させるのも理解できる。とは言え Malvolio がドンちゃん騒ぎを取り締まるのは職務の一環であり個人的な抗議ではない。職務上の行為なら感情に流されて怒りを爆発させるのではなく職務を遂行するために必要な方策を冷静に考えなければならない。つまり自分の主張を相手に聞き入れてもらうために相手が聞き入れやすい物言いをするべきであり正気の人間を狂人扱いしたり騎士を鎗掛け屋や靴直し扱いして相手の反発を買うのでは steward として失格である。Maria の偽手紙に騙されて狂態を演じる前から、Malvolio が一番 steward としての威厳を保っているように見えるドンちゃん騒ぎをする連中をいさめる場面の中で既に gentle attributes に欠け適切な家政を行うことができない steward 像が提示されているのである。

Olivia 邸の階下で騒ぐ連中を取り締まろうとした時と対照的に暗い部屋で Olivia 宛に書いた抗議の手紙は抑制の利いた丁寧な文体で書かれている。

“By the Lord, madam, you wrong me, and the world shall know it. Though you have put me into darkness, and given your drunken cousin rule over me, yet have I the benefit of my senses as well as your ladyship. I have your own letter that induced me to the semblance I put on; with the which I doubt not but to do myself much right, or you much shame. Think of me as you please. I leave my duty a little unthought of and speak out of my injury. (5. 1. 282-89)

夜中のドンちゃん騒ぎに起こされ Malvolio 自身も不快な目に合わされた時と比べて暗い部屋で抗議の手紙を書く時に Malvolio が経験させられている理不尽さは桁外れである。Malvolio は手紙で Olivia に指示された（と思った）通りに黄色い靴下を履き十字の靴下留めをして召使たちには横柄な態度をとり、Olivia に笑いかけたら狂人扱いされて暗い部屋に閉じ込められて偽牧師の訪問を受けた。Malvolio の置かれた状況を考えれば彼の怒りは当然のように思える。しかしこの手紙の中で Malvolio は Olivia を狂人扱いしないし、下層階級の者と同列にしたりもしない。Malvolio の主張—Olivia の指示通りに行動したのに、どうして不当な仕打ちを受けねばならないか—は明確に述べる一方で「奥様と同様、私にも判断力(senses)があります」と言うことによって奥様に判断力が備わっていることを認めている。そして Malvolio についての判断は奥様に委ねる(“Think of me as you please”)と述べることによって Olivia の従者としての分を弁えさらには不当な目に合わされたとの思いから従者としての義務をなおざりにしたことを詫びて手紙を締めくくっている。このように Malvolio の置かれている状況を考慮するならその手紙は「抑制と礼儀正しさの傑作」(Atkin 88)であるから「その劇の最高位の 2 人は彼の手紙だけから Malvolio が正気であると判断する」(Atkin 90)のである。

暗い部屋から解放された Malvolio は開口一番に Olivia に不当な目に合わされたことへの抗議をする。Malvolio は Olivia に否定されても彼の主張を撤回しないが Olivia 宛に書いた手紙の文体で示された節度ある態度は Olivia と対峙して抗議する時にも健在である。Malvolio は不当な目に合わされた怒りを抑えて彼の主張の正しさを裏付ける証拠となる手紙を手渡し “Pray you” をつけて Olivia にその手紙を読んでもくれるように丁寧をお願いする。そして筆跡からも言葉使いからも Olivia が書いた手紙であることを本人に認めてもらった上で何故指示通りに行動したら狂人扱いされたのかについての説明を理路整然と要求しようとする。Davies が指摘するようにそれまでは散文でしゃべっていたのにここでの Malvolio の台詞は blank verse で語られている (26-27)。感情の嵐が吹き荒れているときには verse でしゃべることはできない。verse は秩序や調和を表すから貴族の台詞に用いられ、庶民の台詞には realism を表現するのに適した prose が用いられることが多い。だから verse でしゃべっていることは Malvolio が試練を通して steward が本来備えているべき gentle attributes である抑制と落ち着きを習得したことを韻律の面から観客を含めた聞き手に訴えかける。Olivia の手紙が偽物であることが判明して Malvolio の主張の根拠が崩れたにもかかわらず Olivia が、Malvolio が不当な目にあったことを認め彼をこの件の原告兼判事に任命するのは Malvolio の gentleman にふさわしい物腰が、言われもないのに不当な目に合わされた被害者だという彼の主張の正しさを訴えるからである。

6. gentleman と revenge

劇の終わりで重要な問題が出現する。Feste が暗い部屋から解放された Malvolio を嘲る言葉を口にするのを聞いて「どいつもこいつも (whole pack of you) 復讐してやる」(5. 1. 355) という捨て台詞を残して退場する時に Malvolio は試練を通して獲得した gentleman 像を粉碎するように思われるからである。Malvolio の台詞について Elam は次のように述べている：「“pack” という言葉は Malvolio いじめに加担した者を血に飢えた犬と同一視するが舞台上の人物に向けられた 2 人称は観客をも含むかもしれない」(9)。Feste が Olivia の偽手紙の文章や暗い部屋で彼を信頼して言った Malvolio の言葉に言及することは Malvolio の心を「剥き出しの牙でずたずたに食いちぎる」(3. 1. 104) ことである。Malvolio はその牙の痛みに耐えかねて観客にまで牙を剥く。観客をも血に飢えた犬と見なす激烈な復讐心に裏打ちされた台詞は gentleman に求められている他者への共感や配慮と真っ向から対立する。Feste はもとより Malvolio と他の登場人物との和解の可能性は絶無であり捨て台詞を吐いて退場する時に Malvolio は劇から追放されると解釈するしかないように思われる。一体 gentleman と revenge は折り合えるのだろうか。Malvolio 救出に手を貸した Feste が何故 gentleman に成長した Malvolio に耐えがたい痛みを与えるのだろうか。

「ペンとインクと紙とろうそく」を持ってきてやると約束してから Malvolio の試練を嘲る言葉を口にするまでの Feste の言動を精査すると Feste の嘲りは Malvolio を奈落に突き落

とすことを目的とするのではなく奈落を経験させることを通して彼に更なる成長を促すことを目的としているように思われる。この劇の初めで Malvolio は「奥様がお笑いになりあいつにチャンスを与えておやりになりませんかといつは口輪をはめられたも同然です」(1. 5. 70-71)と言った。Olivia に重用されている Malvolio と異なり阿呆ぶりが古くなっている Feste はいつお払い箱になってもおかしくない状況下にあった。お払い箱になることは「縛り首になるも同然」(1. 5. 15)である。そういう危うい立場にある Feste に向けられた Malvolio の言葉は Feste の臍腑を抉ったであろう。Feste は彼の臍腑を抉った人物を救出するために手紙を届けて「あのような状況下にある人にしては立派に悪魔の親玉を遠ざけています」(5. 1. 268-69)と言う。Feste はわざと変な声で手紙を読んで Olivia が Fabian に手紙を代読させるように仕向けていることも注目に価する。Fabian は Malvolio の手紙を見せろと要求して彼が手紙を届けるのを妨害しようとした人物である(5. 1. 1-4)。Fabian に手紙を読ませることは Malvolio 救出の邪魔立てをしようとした当人自らに一同の前で Malvolio の成長を認めさせることにつながりうるからである。また、手紙を届ける道中での Orsino との会話の中で Feste が Malvolio から突きつけられた辛らつな言葉を通した彼自身の成長に言及していることも重要である：「敵は率直においらが阿呆だと教えてくれます。だから敵を通して自分を知ることができます」(5. 1. 13-15)。賢い阿呆は相手の「気分や人や時」(3. 1. 52-53)を見て鋭い矢を放つ。なるほど Feste は暗い部屋から解放された Malvolio に深手を負わせる。しかしそれに先立って試練を通した Malvolio の成長を認め、敵から与えられた辛らつな言葉を通した彼自身の成長にも言及していることは Malvolio の更なる成長-阿呆の相棒の goodman devil から自分に深手を負わせた相手を許す真の gentleman にふさわしい人物に成長すること-を信じた上での行為であることを示唆する。

「どいつもこいつも復讐してやる」という言葉の激しさから批評家たちはこの劇の終わりで Malvolio は追放されると解釈してきた。しかしこの劇の初めで Malvolio には gentle attributes が欠けていることを指摘していた Olivia が—「お前は自惚れ病にかかっているのよ」(1. 5. 73)—激烈な敵意を露にした台詞を投げつけられた後で一言も Malvolio を非難する言葉を口にせずむしろ Malvolio に同情する言葉を口にするのは注目に価する：

「Malvolio はとてつもなくひどい目に合わされたわ」(5. 1. 356)。Olivia の台詞は暗い部屋での試練を通して Malvolio が示した成長は激しい復讐心をもってしても覆されえないものであったことを示唆している。Orsino の「追いかけていって和解してくれるように頼め」(5. 1. 357)という台詞も重要である。Olivia 同様 Orsino も Malvolio の steward としての適性が損なわれたとは感じていないことを示唆しているからである。Orsino はさらに続けて「[Malvolio の訴えで投獄されている船長の所在が]わかり、よき時期が到来すれば式を挙げよう。それまではここに滞在させてもらう」(5. 1. 359-61)と言う。「それまではここに滞在させてもらう」と言うことは Malvolio の気持ちが和らぎ 和解する気になるまでゆっくり、じっくり待とうという意思表示である。この台詞は時間が与えられれば

Malvolio はこの試練をも乗り越え、さらに成長しうると Orsino が考えていることを示唆する。

7. 結び

「どいつもこいつも復讐してやる」という退場際の Malvolio の台詞のインパクトが強烈なので Malvolio は劇から追放されると考えられてきた。だが Orsino や Olivia の頑なな心をほぐす教育者である Viola が尊敬の響きを持つ “gentleman” という語を Malvolio に用い、彼女の言葉がきっかけとなって Malvolio が暗い部屋から解放されることは Malvolio が試練を通して成長したことを示唆する。なるほど Feste は暗い部屋から解放された Malvolio にもう一度剥き出しの牙を突きつける。Malvolio はその痛みを耐えかねて劇中人物はもとより観客に対してまで牙を剥く。しかし Feste が Malvolio の手紙を届けることは彼の臍腑を抉る言葉を投げつけた相手を許す行為である。しかも Feste は 2 度目の牙を剥く前に敵から突きつけられる辛らつな言葉を通した成長について言及している。つまり暗い部屋での試練を乗り越えた Malvolio にその試練をも上回る痛みを課す時に Feste は Malvolio の更なる成長の可能性を信じていると思われる。steward の gentle attributes が問題となる劇の終わりでこの劇の最高位の 2 人の貴族が Malvolio の剥き出しの敵意を表す言葉にも関わらず Malvolio の steward としての適性を問題にするどころかむしろ Malvolio に同情したり、Malvolio との和解を促すことは、Malvolio の更なる成長の可能性を認める Feste の見解を支持するように思われる。劇の終わりで主要登場人物-Viola, Feste, Olivia, Orsino-が一致して Malvolio の steward としての適性を認めていることは、定説に反して劇の終わりで Malvolio が追放されないことを示唆していると言えるだろう。

注

1. テキストは *Twelfth Night or What You Will* Ed. Elizabeth Story Donno. 1985 Cambridge: Cambridge UP. 2003 を使用した。

引用/参考文献

- Atkin, Graham. *Twelfth Night: Character Studies*. London: Continuum, 2008.
- Berry, Ralph. *Shakespeare and the Awareness of the Audience*. London: Macmillan, 1985.
- Davies, Stevie. *Shakespeare: Twelfth Night*. Penguin Critical Studies. New York: Penguin, 1993.
- Elam, Keir. “Endings and Beginnings.” Introduction. *Twelfth Night or What you Will*. By William Shakespeare. London: Cengage Learning, 2008. 1-10.
- Evet, David. *Discourses of Service in Shakespeare’s England*. New York: Palgrave,

2005.

“gentleman.” *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. 3rd ed. 1974.

“good.” and “Goodman.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd. ed. 1998.

Neill, Michael. *Putting History to the Question: Power, Politics, and Society in English Renaissance Drama*. Columbia: Columbia UP, 2000.

Schalkwyk, David. “Love and Service in *Twelfth Night* and the Sonnets.” *Shakespeare Quarterly* 56, no. 1 (Spring 2005): 76-100.

Shakespeare, William. *Twelfth Night or What You Will*. 1985. Ed. Elizabeth Story Donno. Cambridge: Cambridge UP, 2003.